

しゅてわか！

炸裂プリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日の夜。定期的に開かれる素材収集レイシフトにて、とあるサーバント二人の、なんてことは無い単なる会話を綴った物語。

目次

しゅてわか!!!!	しゅてわか!!!!	しゅてわか!!	しゅてわか!
23	15	7	1

しゅてわか！

「なあ、ぼんぼん」

「誰が平成狸合戦ホニヤララか！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いや、せっかく渾身のツツコミを見せたのだから、そんなキョトン顔をされても困る」
「いやあ、そないな反応が帰ってくるなんて思ってたなあ。てつきり返事の代わり
にうちの首が飛ばされる思うとったんよ」

「人を短気な首斬り魔の様な言い方は良してもらおう。お前は斬るべき鬼だが、今は共に肩を並べて戦場に立つ同胞だ。そのようなこと・・・・・・・・しない」

「妙な間と、執拗に合わせようとする眼を何とかせんと、だあれも信じてくれへんよ」
「ははっ」

「愛想笑いで誤魔化すかあ」

「はっはっはー・・・・・・・・で、何の用だ酒呑童子」

「いんやあ、今回もお互い仰山戦つて、たあくさん旦那はんの役に立ったねえ、と思うて

な?」

「ああ、そう言えば先程のカカト落として接近からの貫手は綺麗に極まって見事だったぞ」

「あら褒めてくれるん? ふふ嬉しいなあ」

「別に褒めてなどいいない。私でもできるあの程度の技を、鬼のお前でも出来たことが珍しかっただけだ」

「あらあら、顔真つ赤になって可愛らしなあ。……ほんでな、今日も楽しく背中合わせで生き残った記念に、乾杯でもしようと思って、出発前に食堂からちよろまかしてきたんよ」

「赤くなつてな……いや待て、食堂と言うと、エミヤ殿が管理しているあそこからか!」

「そう」

「なんならブーディカ殿と頼光殿も常駐しているあの食堂から!」

「そ。その食堂」

「宮本武蔵と佐々木小次郎も居る、あの鉄壁の布陣に」

「その二人はツマミ食い目的やから、毎回返り討ちにあつてる面子やね」

「忍び込んで、あまつさえ酒蔵を漁るとは……これには流石に感服する。いや、

私もやれと言われれば出来るが、命知らずの所業だぞ。私は天才だから出来るけども」

「そないに対抗心燃やされると、なんや嬉しくなってくるわあ」

「べ、別にお前相手に対抗心なぞ——」

「ほれ、日本酒」

「——」

「ほんでこれが洋酒……んー「わいん」言うんやつけ？」

「おお」

「そいでこれが、なんや髑髏の杯と一緒に置いてあったチンタ酒——って、これも「わいん」やん。あとこれも、なんや蔵の奥で後生大事に仕舞われとった古酒やね」

「おおおお！——ん？ この札……いやラベルが貼られて……んん？ 字

が掠れて読み取れんな。 荊の字しか分からん」

「ほい、まだあるんよ。濁り酒に焼酎にういすきー、黄金の蜂蜜——」

「いや、待て待て待て！ 何処にそんな量を詰めてきた！ というか、そんな大荷物を持つてワイバーンの群れと大立ち回りしていたのかお前は!!」

「大荷物って言われてもなあ、うちの瓢箪に詰めてきたとしか……それに、どんなに重しを持つていようと、相手は所詮、羽の生えた蜥蜴やろ？」

「……まあ、そうだな。楽勝か」

「やろ?」

「ふむ。まあしかし、これだけの量を持ち出したのだ、カルデアに帰れば打首も覚悟せねばならんな」

「あつはつは! せやねえ。うちは気配消して逃げ——あ、赤い弓兵さんと牛女が居ったね。詰んでるなあ、これ」

「その状況を作ったのはお前だがな」

「んふふ、そないに褒めんだよ」

「褒めてない——ふう、どうせ私も巻き込んで共犯扱いにする気だろう、お前は」

「んふふー、どうやろねえ?」

「惚けるな阿呆……はあ、こうなつたらヤケだ。どうせ打首説教を受けるのならとほぼ、とことん楽しんでから、次いでに下にいる二人も巻き込んでしまおう」

「あらあら、ええねえ、ええねえ! みいんなで楽しく笑いながらお説教受けましょ」

「説教だけで済めばいいがな——さて、そろそろ杯を寄越せ。喋り過ぎて喉が乾いたぞ」

「はいはい、慌てんでもぼんぼこの杯はうちが大事に持つとるよ……ほれ」

「だから、誰がぼんぼ……おい、これはお前の杯だろう」

「んふふ、たまには交換こして呑みましょ? ほら、お月様もあないにまあるくて綺麗な

んやから——ほい乾杯」

「ん——意味が分からん。これが毒杯だったらお前も巻き込んで死んでやるからな。覚悟しておけ」

「あら、あらあらあら！　うち、告白を受けて貰えたわあ。どないしよう！　嬉しいわあ！」

「はあ？　何をはしゃいで……待て、待て待てお前、酒呑童子お前さっきの問答は夏目漱石的なそれだったのか!？」

「えー？　さあ、なんのことやろね」

「しゅてーん!!!」

「あら顔真つ赤、もう酔ってしまったん？」

「この、そこになおれえ！　素っ首叩き斬ってくれるっ!!!」

「おお、怖い。そんなこわーいお侍さんは縛っとうねえ」

「ええい！　引っ付くな！　離せ!!　刀が抜けんだろうがあっ!!」

『ねね、茨木ちゃん。あの二人、木の上でお酒飲み交わしながら、なんの話してるか分かる?』

『盗み聞きすると酒呑と牛若に今晚のおかずを一品盗られるから嫌だ』

『あ、そう……。と。ころ。で。さ。』

『ぬ？　なんだ。吾は焚き火にくべたサツマイモの世話で忙しい。後にしろ』

『この大量に集まりすぎた逆鱗、どうやって持つて帰ろう？』

『知らぬわ——ヒエツ、一緒に入れた栗が爆ぜたあ！』

『あつつ！　あつついよ茨木ちゃん！　これ、まるで散弾銃だよ！　一体全体、何個入れたのさつ、さながら大江山と本能寺の大炎上コラボだよ!!』

『止めぬか縁起でもなアツツウイ!』

しゆてわか!!

酒呑童子と牛若丸がチーム組み始めた時のお話。

「……お前」

「あら、あらあらあま怖いお顔。堪忍しとくれやす。うち、小心者やから、そないな顔されたら縮こまつて動けなくなつてしまいます」

「戯れ言を……! 羅生門に続く鬼ヶ島での因縁、忘れたとは言わせんぞ」

「えー? そないなこと言われましても、うちは『そのうち』とは別人やさかい……
イチヤモンつけられても困るわあ」

「舐めた口を叩いてくれる……! 酒に浸かりすぎてその脳まで溶かしたか」

「うふふ、それはそれは……夢のように素敵な姿やねえ。出来ることなら、たあつぷり気持ちよくなりながら、お酒に溺れてみたいわあ。ああ、そうそう。金髪の小僧は元気? 居るんなら、今すぐ会いに行きたいんやけど……あと、あの赤髪のお嬢ちゃんも」

「つ!!!」

「おー、怖い怖い。今度は殺気だけやなくて鯉口まで切りおった。恐ろしゅーてたまらんわあ」

「もう、黙れ。お前を主殿の元へは行かせん。そして、己の意思でその口を閉させないと言うならば、私自ら手を貸してやろうっ!!」

「あつは!! 今、本気やったねえ? 本気で、うちの、首を! 落とそうと振るつたねえ!」

「っ! 私 の 抜 刀 を、 素 手 で ! ! ?」

「——あはっ、絶対に、ぜえつたあいに斬れると思つとつたんやね。ふふっ、可愛らしいわあ。お酒呑んだみたいに、お顔真つ赤つかにさせて. ほおら、もつと力入れんと、うちの首筋には届かんよ?」

「くっ——この!」

「やんっ、お侍さんが刀手放して蹴り入れよるなんて、ビックリやわあ」

「——かつ、ひゅ」

「うち、ビックリしすぎて思わず首に手引つ掛けてもうたやんか. もお、おいたはお良しよ?」

「かつ、ぐゅ」

「んー? なんて?」

「ふゆだ、たいてひ」

「は——っ!?」

「ゴールドデン——ドラアアアイブ」

!!!!!!

轟ッ!

「ぐっ、あつ——かはっ」

「ごほっ、ぐっげほがは、あつくぐっ」

「大丈夫か牛若丸! くそ、テメ酒呑童子! これからおめえはこの人とチーム組んでやってくんだから、仲良くしやがれてマスターから言われてたろうがっ!」

「ふ、ふふふ、金髪の小僧が、じ、自分から会いに来て、くれはっ……た。うれ、うれしいわあ」

「ちっ、テメエは頭冷えるまでベアー号と抱き合っつてな。牛若丸、立てるか? アンタも

一回、マスターの所に戻って頭冷やしてこい」

「ふっ、ふっ、ふう——。はい、無駄な手間をお掛けしました。申し訳ございません。金時殿」

「よせよせ、頭なんか下げんじやねえや。仲間が困ってたら助ける。これ、ゴールドデンの基本だぜ?」

「ええ、そうでしたね。——では、申し訳ありませんが、忠告通り、主殿と少し話してき

ます」

「ああ、そうしな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ベアー号、退かすぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・よお、酒呑。酒呑童子」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのな、俺はお前にあやま——」

「その先を紡いだなら殺す」

「————っ」

「うちは、鬼で、あんた達は人で、うちが悪さして、あんた達は裁く側で——そういう、お話やろ。そういう、在り方やろ、うちらは」

「っ、けどよ！俺は！」

「くどい」

「っっ、酒呑、童子」

「うちの在り方はな、小僧。もう、『そういうモノ』として、定まってしまったんよ。誰が、なんと言おうと、うちはわあるい鬼さんで、あんたは、悪い鬼から童たちを守る正義の味方で・・・・・・・・・・な？」

「つ、でもよ、俺っ、おれはっ——おれはあつ！」

「よーしよし、男の子が簡単に泣いたらあかんと、小ちやい頃に言ったやろ？ ほおら、もう、うちの手が届かんくらい大きゆうなつたんやから、しやんとしなさいな」

「ふっ、ぐず」

「そうやね、その胸に点つた熱い炎は、簡単に消せるもんやなかつたね？ ごめんな、うちが出会つてしまったせいで、ずっと、ずうつと、辛い思いさせて」

「っは。酒呑——」

「例え、どれだけお酒に溺れようとも、どれだけ綺麗な宝石、肉、風景を手にしようとも、ちいとも満たされん時が、あるんよね」

「っ」

「でも、それももうお終い。本当なら『二度目』はないんやから。今から、この瞬間から、うちらは旦那さんの元を集つた勇士の一欠片に『変わる』。だから——うちは、鬼で」

「おれは、正義の、ヒーローでっ」

「鬼のうちは、鬼らしく、暴虐武人に、旦那さんが出来ないやり方で、壁を崩す」

「おれは、俺は！ 泣く子も笑うゴールデンツ！ 天が呼び、地が嘆く時、金色の雷と共に、悪を討つ！ 俺がやるのは、ヒーローとして、大将——マスターを、この手が千切れて届かなくなるその日まで、マスターの道を切り開くこと！」

「ふふつ、かつこええなあ小僧。惚れ直してしまいそうやわ」

「おま、さっきの台詞は何処へ!？」

「あはっ、冗談じよーだん」

「あのかなあ……」

「ほんなら、うちは仲直りに行つてきます」

「……ああ。そうか。牛若丸と喧嘩してたんだったな」

「ふふ、そーよ? でもな、小僧。喧嘩できる仲ほど仲良おなれるものなんよ?」

「そーいうもんか?」

「そーいうものよ」

「んん、分かんねえ。直ぐに手と手を繋げられればそれでゴールデンじゃねえか」

（ふふ、だつて、なあ金時?）

（うちらが、そうだったやないの）

『主殿ー！ 何故、酒吞童子と私を組ませたのですかっ！』

『えっ……だつて牛若丸の速さと技量に着いていけそうなの、酒吞ちゃんだけだつたし』

『そんなつ！ 金時殿やハサン殿がいるではないですかー！』

『金時はベアー号が小回り効かないせいで牛若丸の機動力に合わないし、ハサン先生は……その』

『おや、魔術師殿お呼びですか？ ご機嫌麗しゆ』

『ヤングパワーが足りなくて、元気いっばいな牛若丸に振り回されちやいそうで』

『なるほど……考えあつての組み合わせ、だつたのですね』

『うん。ごめんね？ 本当に嫌だつたら別のチーム分け考えるから』

『いえ、いえいえいえ！ せっかく主殿が考えてくださった組み合わせ、無碍にできませんようか！ この天才に不可能はありません。あのような鬼一匹、見事乗りこなしてみせましょう！』

『おおー！ 頼もしいー！』

『ふんす！ ふんす！』

『あらあ、なんや楽しそうな雰囲気やねえ』

『あ、いらつしやい酒呑ちやーん』

『』

『うお、どうした呪腕の。まるで愛娘に毛髪量と体臭を指摘された父親のような死臭を漂わせて』

『百貌よ、私はもうダメかもしれん』

『えっ』

しゆてわか!!!

VS新宿のヤの字。またの名を魔術髄液集め。

グロ注意(?)

「ほい隙あり」

／ぐああああ／

／あ、アニキイイイ！ アニキのろろろ、肋骨がポロリイー!?／

／このクソガキイ！ ワシの息子に手え出したおとしま／

「五月蠅いぞ木つ端風情が」

／ガッ——／

／お、オヤジイイー!／

／オヤジのく、くく首が、首がポロリしたアアアア／

／／／おどれらッッ！ 絶対に許さんぞゴラア!! 生きて新宿出られると思うな

よおお!?!／／／

「………なあ牛若」

「どうした、酒呑」

「こん人ら、単純にうるさいんやけど」

／＼ぐああああ／

「言うな。私も煩わしく思っているが、主殿のために黙殺しているところだ」

／＼かふつ——／

「五月蠅いのを潰しても周りが騒いで、数を減らしても何処からともなく沸いてきよつて………正直、うち飽きてきたわあ」

／＼おで、おでの腸がががが／

「言うな。ぶつちやけ私も先刻から何も考えず薄緑を振っているだけの機械と化しているが、後方で見守っているだけの主殿はもつと手持ち無沙汰なんだぞ」

／＼——かひゅ／

「せやったねえ。——あ、旦那はんが手振つとるよ。両手で大きくブンブんと、可愛らしなあ」

／＼やめで、あだま、あだま、ぶぶぎないでゆべあ／

「なんだと。おーいっ！ あーるーじーどーのー！ この牛若丸と酒呑童子、魔術髓液を目一杯集めて戻ります故、期待して待っていてくださーいっ!!」

／＼あ、あれ。俺の腕、どこいった——あつ／

「あらまあ、嬉しそうに手振り返しはって——少しだけ妬けてまうわあ」

／＼おがああ。あ、あ、あ、腹のなががぎまわさないでへえ／

「あーるーじーどーのー！　．．．．ん？　主殿の口が動いて——何か伝えようとしてる？」

／＼あつ——／

「んー？　なんやろねえ。ふふふ」

／＼あつ、かひゆつ、つつうつあつツツ——／

「んー、んんん．．．．おおつ？　なるほどなるほど。読唇術にてご命令賜りしました！　この牛若丸、誠心誠意乾坤一擲一意専心の一心で奮って参ります！！　往くぞ有象無象の雑兵ども——その命、我が主が為に散らせて見せろ」

／＼む、無理だ。勝てねえ！　癪だが雀蜂を呼べ！　ここを荒らされるよりやあ幾分か

——いやかなりマシだア！／

／＼へいつ。おい、ヤス！　これ使つて雀蜂共に話付けてこい！　秒でだつ！／

／＼は、はいアニキ。おれ、行つてきやす！／

「あらあ？　そのあんた。ええもん持つとるね。ちよいとうちに貸してくれへん？」

／＼へ？　——うへつ、へへへつ、ヒック。なんて綺麗でエロいねえちゃんだア。イ

イツすよお。こんなんで良かったら幾らでも持つてつてくだせエ。えへへえ／

＼ヤスウ!?／

「ふふ、ありがとさん。やあん、こんなに沢山のお薬貰えるなんて思うてなかったわあ。ありがとうね」

＼えへへへへえ／

＼ヤスウ! 目エ覚ませ!! もう髄液はいい! 早くこつちに逃げてこい!!／

「ご褒美、あげないといかんねえ」

＼ご褒美イ!／

＼ヤスウ!／

「そうやねえ——ああ、いい事思い付いたわ。うちが気持ちよおく食べてあげる。ふふふ」

＼た、食べてくれりゆんれすかあ!?!／

＼ヤス待つとれ! 今助けに行くぞ!! って何服脱いどんじやあ!／

「それじゃあ、いただきまあす」

＼わーい! 召し上がれー!／

＼ヤスウ!／

「ゴリユッ」

／＼イギエ!? はれ? お姉さんなんれ、おれの腕食べて——／

「あ、不味いわ。薬漬けで病気の腐り切ったグズグズの林檎みたいな味。ぺっぺっ、やっぱ今の無し。普通にすり潰しましょ」

／＼ゴブエツ／

／＼ヤスウウウウ!?／

「邪魔だ」

／＼おっふ(斬首)／

「あら、ぼんぼん」

「牛若丸と呼べ酒乱童子」

「やあん、そないにいけずな呼び方はやめて欲しいわあ」

「喧しい。………口元、血が着いてるぞ」

「あらあ、恥ずかしいところを見られたわあ。ふふふ、拭いてくれてもええんよ?」

「自分で拭け」

「やん、ほんまいけずやわあ。——あ! もしかしてうちがあの木っ端に口付けたの気

にしてるん? ヤキモチ?」

「そんな訳があるかつ!」

「ムキにならんでもええやん。ほんま愛らしい反応するわあ」

「勝手に言っている色情鬼め。……そんなことより酒呑、北方にコイツらの拠点を見付けた。攻め入るぞ」

「あらあら、なんや楽しそうやね。蟻の巣に水流し込むみたいに神便鬼毒でも入れてみよか」

「ああ——面倒だからそれもアリだな。よし、露払いはしてやるからやつてこい」

「あはつ、頼もしいわあ！ それじゃあ——えすこおと頼みます」

「ふんつ、任されてやろう」

「んふふ、なんや楽しゆうなってきたわ。牛若に背中任せて暴れるんはやっぱええねえ」
「私は何時後ろから喰われるか気が気でないがな」

「ほーかほーか。牛若も楽しいんやね。両想いでうち嬉しいわあ」

「お前の耳はどうなっているんだ！ 私の言葉がちゃんと聴こえてないのか！」

「んふふー♪」

『もう良いから！ ヤクザさん達が可哀想だからあ！ かーえーろーうーよー！』
『やつべえよ、何だこれ。完全にスプラッタ映画じゃねえか』

『はい……酒呑童子さんと牛若丸さんが揃うと大抵こんな感じに——あ、先輩。
たぶんそれは聞こえてないです』

『かーえーろー！ かーえーろー！ わたしのーおーうちーっ！』

『先輩！ そのリズム感で叫ぶのは何やら危険な香りがデンジャーなのですが!』

『散歩か、散歩なのか。お前らにとってはこれが散歩なのか。坂道(屍の山)トンネル(風穴開いた死体)草っ原(死屍累々)なのか。……早まったかなあ、ここに召喚されるの』

『ほら、先輩！ 先日召喚に依じてくださったナポレオンさんが悔恨の表情で嘆いてますからっ！ 変なテンションで盛り上がるのは止めましょう!』

『え、あ、嘘うそウソっ。おわあー！ 魔術髄液があんなに沢山はん!! 酒呑ちゃんも牛若丸ちゃんも凄いつ！ 愛してるよおおお』

『……おーらら』

『ああつ、ナポレオンさん待つてください！ 退去の光を出しながら帰ろうとしたいでくださいー!!』

『これで新宿のサーヴァントたちを強くできるうー!』

『せんぱーい！ ナポレオンさんを引き止めてくださーい！』

しゅてわか!!!

メカエリチャン一号機お迎え記念のお話。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「あーあ、出会ってしまいましたね」

「なあなあ、ぼんぼ」

「牛若丸と！ 呼んで！ 貰おう！」

「やん。耳元で叫ぼんといて。ゾクゾクしてしまうわあ」

「無敵かお前」

「んー、ふふふ♪ うちは好きなもんは好きなだけ、手元にしまっておきたい夕チなんよ」

「そうか・・・・・・・・いや答えになっていないぞ」

「そいでな、ぼんぼこ」

「うしわ・・・いや、もう良い。好きに呼べ」

「あら張合いのない」

「いいから話せ。まあ、どんな内容なのかは予想できるかな」

「それなら話が早いわあ。あんな、そこに居るギンギラギンのカラクリ娘二人」

「メカエリチャンとその二号機だな」

「なんでさつきから見つめあつてるん？」

「今日の出撃編成は確認したか？」

「んー。うちは「ちえいて城」攻略が終わるまで休んでてええよって旦那はんに言われたさかい、最近は見えてないんよ」

「怠惰な・・・」

「いや、あんたもやろ。昨日も朝から晩までうちと一緒にベロンベロ——」

「ンにはなつていない。断じて！」

「ええー？」

「・・・話を戻すぞ」

「はあい」

「今回の編成表に書かれた名前がな「メカエリチャン」としか書かれていなかったのだ」

「あらあ。それじゃあまさか」

「ああ、そのメカエリチャン二人はどちらが編成されるのか、或いは双方が含まれているのか。片方だった場合はどちらが行くべきか、それで睨み合っている」

「んー、今までやつたら二号さんが行けばええんやけど」

「うむ。今回からは一号が新たに参入した故、な」

「もー、旦那はんもおつちよこちよいやわあ。名前はだあいじな物なんやから、ちゃんと書いたげないと、ねえ？ ぽんぽん」

「そうだな。名前は大事だが、今のお前が言ったところで欠片ほどの説得力もないぞ」

「あらそう？」

「こいつ……！」

「ふふふ、どうしたん？ そないに熱うい視線向けてきて。うち体が火照ってしまいわあ」

「そうかそうか、そんなに身体が熱くて仕方がないなら協力してやろう」

「それって——やん♪ ぽんぽこの助平♪」

「さあ、行くぞ——」

「あらあら、うちとうとう食べられてしまうんやね」

「シミュレータールームへ！」

「………まあ、分かつとったけどね——あん、そないに引つ張られた

「らお手手が抜けてまうよ」

「いっそ抜けてしまえ！」

『……なんなのアイツらは。散々わたしたちを不躰に眺めていたと思ったら、今度は手を繋いで去っていったわ』

『あれなるは、ライダーのサーヴァント「牛若丸」とアサシンのサーヴァント「酒吞童子」』
『!!』では、彼女達があの噂の』

『ええ。マスターと共に特異点を駆け抜け、その背を合わせて数多の戦場を蹂躪し、跋扈した——』

『『カルデアのトップサーヴァント。天下無双のケンカツプル……!!』』